

## あとがき

### 山田正亮：新しい幕明け

今回の山田正亮展は新作油彩である。展示作品は500号の大作を含む13点で内容はカタログに収録のとおりである。また、この9月なかばには待望の「山田正亮作品集」が美術出版社から刊行される。したがってこの展覧会は画集刊行記念展の意味合いを併せ持っている。同時に当画廊と同じビルの3階にあるサン・ギョーム（代表 葛城薰）で山田正亮新作パステル展が開催される。併せてご覧いただくようご案内申し上げる。

展覧会カタログのテキストは篠田達美さん（美術評論家・みずゑ編集長）にお願いし、「絵画性という意味」と題する論稿をご寄稿いただいた。なかなか力のこもった山田正亮論で、深謝申し上げる。なお、パステル展のカタログには横山勝彦さん（練馬区立美術館学芸員）が山田正亮論を展開されている。併せてお読みいただければ幸いである。

ここで「山田正亮作品集」について記しておきたい。かねてから山田正亮の画集の全貌を紹介する本格的な画集刊行の計画があったが、ようやくここに実現の運びとなった。ただいま私は出来上ったばかりの画集を傍に置き、それを眺めながら感慨無量である。作家山田正亮ご自身は勿論のこと、これまで山田正亮のしごとを見守ってきた人々、就中、光枝夫人の思いは格別と推測される。

画集の内容は次のとおりである。画集タイトル：「山田正亮作品集」、判型：280×290mm、体裁：上製布クロス装・化粧箱入り、総頁：252頁、用紙：西独輸入最高級ダルアート紙、カラー：192頁、収録作品：228点（1949～1990）、エッセイ：山田正亮「“Work”循環と統合」、早見堯「絵画を生む絵画」、本江邦夫「ストライプの画家、あるいは絵画の始源へ」、資料：作家略歴、参考文献、収録作品来歴、定価：25,000円、発売：1990年9月中旬、発行：美術出版社、発行部数：1,500部。

収録作品は作家の自選による。今まで40年余にわたるしごとのなかから生れた作品は約3,000点にのぼると推定される。全画業を網羅する作品集が出来上がったのはほぼ40年間にわたる作品の整理が

行き届いていたという事実による。このことの意味は重大である。つまり、山田正亮が自分の作品に強い愛着を持っていたしであり、さらによく言えば山田正亮は自分の作品に自信をもっていたことのあかしである。だからこそ30年、40年前の古い作品の存在も写真もデータも霧散せずに残り、この作品集が実現したのである。

パウル・クレーは自分の作品に通しナンバーをつけ、整理した作家であるが、山田正亮も同様に作品に通しナンバーを付け管理している。この二人の作家は風土も作品のなりたちも考え方も全く異なるが、しかし二人とも知的で自分のしごとに自信をもっていたことでは共通している。

この画集をみていると、山田正亮という一人の作家の画業の歴史が現代美術の歴史としてみえてくる。すなわち、キュビズム風の静物画から出発し、絵画の平面のしごとを純粹に、頑固に、孤独のなかで斗ってきた山田正亮の足跡は、現代美術史の流れと重なっているのだ。個体発生は生態発生を繰り返す、とは生態学の法則であるが、それを私は思い起こすのである。つまり、このことは山田正亮がオーソドックスな作家であるあかしと言えよう。

視点を変えてこの画集を画集そのものとしてみる時、戦後におけるわが国の現代美術の作家の画集として出色のものと言えよう。内容、体裁、写真、テキスト等よく吟味されており、やっと日本の現代美術の領域にも本格的な画集が出版される時代になったナという感がする。早見堯、本江邦夫両氏の山田正亮論はそれぞれ長らく山田正亮のしごとを見守ってきた評論家のエッセーだけに、奥深く、説得力がある。写真はほとんど内田芳孝氏の撮影によるものであるが、恐らく作家に次いでもっと多くの山田正亮の作品をみてきたのは彼であろう。内田さんの写真なくしてこの作品集は成立しなかった。と言える。最後になったが、この作品集の編集者である椎名節氏の名前を記さないわけにはいかない。神経の行き届いた素晴らしい画集を現実のものとした椎名さんに感謝申し上げる。この画集には編集者の情熱が伝わってくるのを感じるのである。

来る9月19日(水)の夜、日比谷公園内の松本樓で「山田正亮作品集出版記念パーティ」を予定している。山田正亮さんを囲み、関係者が集ってお祝いのパーティを開催することになった。これまで述べたことは、その会場で私がスピーチで述べるであろう諸点を予め申し述べるかたちとなった。当夜の盛会の様子をただいま思い描いている。

さて、今回の新作展について若干申し述べておきたい。まず作品についてであるが、ダイナミックで力強いものになってきた。従来の枠組

みが消え、十文字(プラス、+)の形体がその名残りを留めているかのように見えるが、これがクッキリと描かれていて目を射る。そして斜めに走るストロークが際立つ。1990年代の始まりを予感させる力作である。

1990年に入ったので山田正亮の作品はFの作品番号が登場した。ご存知のように山田正亮の作品は年代別に頭番号がつけられている。すなわち、1940年代A、50年代B、60年代C、70年代D、80年代Eである。今回はFの頭文字がつく初めての展覧会となった。そして今年、山田正亮さんは還暦を迎えた。つまり60才(1930年1月1日生れ)である。暦は新しくなり、新しい幕明けとなった。

また、当画廊の山田正亮展は今回で12回目を迎える。1979年10月「1960年代後期の絵画」(2色のストライプ)を第一回とし、毎年山田正亮展を開催してきたのである。つまり当画廊は山田正亮とともに成長して来たという感がするのである。評価されることの遅れていた山田正亮と遅れて現代美術の画廊として出発した当画廊とは、不思議な因縁で共通していると言えよう。面白いものである。

人間は生れた途端に死すべきものと規定されている。生きと生けるものはすべてそうだ。植物は生理、動物は本能で生きるが、死すべきものと知っているのは人間のみである。このような宿命を負って人間は生きているが、私などアバウトで幾分楽天的な人間は、常日頃そんなことは忘れてしまっている。忘れているから生きているというのが実際のところであろう。しかしこの年(私は62才になった)になると、時に立ち止まって考えることがある。死ぬまでどう生きるか?まだやるべきことは多いな、などと思う。そしてやせている山田さんとふとっている私とはどちらが早く死ぬのだろう、などとボンヤリ思ったりする。山田さんはこれまで死線を三度ぐぐり抜けている猛者だから私より強いだろうな。……とは言え、山田さん、健康に留意され、新しいしごとを展開されることを希望しています。私もまけずに頑張りましょう。幕が上ったところですから、それに昔よりもすこし見通しもよくなってきたようですから……。

1990年9月9日

佐谷画廊  
佐谷和彦